

(様式第3-1号)

論文要旨

論文題目 ネパール国カトマンズの一般および貧困人口におけるパートナー間暴力に関する研究

氏名 大城 あずさ

要旨

背景：都市の一般人口と貧困層における夫婦間暴力(Intimate Partner Violence; IPV)の比較研究は乏しい。
目的:ネパール都市部の一般人口および貧困層における夫婦間暴力(intimate partner violence; IPV)の prevalence および危険因子を同定する。
方法:本研究は対面式質問紙法により調査した横断研究である。対象はカトマンズに居住する 905 人の既婚婦人(15 歳以上 49 歳以下)。そのうち 680 人は無作為抽出により選択した一般人口であり、225 人は意図的に選択した 2 つの貧困地区の住民である。夫による身体的暴力経験の prevalence およびさまざまな社会的・人口統計学的因子と身体的暴力の関連を分析した。
結果:都市部貧困層における夫からの身体的暴力の経験は 33.8%に認められ、一般人口 (19.9%) に比して有意に多かった($p<0.01$)。また、両人口において、夫の飲酒頻度、一夫多妻、家庭の低い経済レベルは夫からの身体暴力経験に有意に関連していた。一方、夫の教育レベルの低さ、女性の若年結婚は一般人口のみで有意な関連を示した。
結論:都市一般人口に比較して貧困層では 夫からの身体的暴力が有意に多く、危険因子にも違いがある。都市貧困層に対しては独自のデータ収集および介入が必要である。

Abstract

Title Intimate Partner Violence among General and Urban Poor Populations in Kathmandu, Nepal

Name Azusa Oshiro

Abstract

Background: Comparative studies are lacking on intimate partner violence (IPV) between urban poor and general populations.

Objectives: To identify the prevalence and risk factors of physical IPV among the general and poor populations in urban Nepal.

Methods: A cross-sectional study was conducted by structured questionnaire interview. Participants included 905 ever-married women in Kathmandu ages 15 to 49 years. Of 905, 680 were randomly selected from general population and 225 were recruited from urban poor population, who lived in purposively selected two communities. The prevalence and association between ever experiencing physical IPV and socio-demographic variables were examined.

Results: The prevalence of physical IPV was 33.8% among the urban poor population (n=225) and 19.9% among the general population (n=680) ($p < 0.01$). Several factors were significantly associated with physical IPV in both populations: the frequency of the husband's drinking, polygyny, and lower household economic status. However, two factors were associated with physical IPV only among the general population: the husband's lower educational level and early marriage.

Conclusions: Compared to the general population, the urban poor population showed a significantly higher prevalence of physical IPV and differences in the associated risk factors. The urban poor population requires focused data collection as well as tailored interventions to reduce IPV.

(様式第5-2号)

平成23年 / 月 7 日

琉球大学大学院

保健学研究科後期課程委員会 殿

論文審査委員

主査 氏 名 外間 登美子



副査 氏 名 宇座 美代子



副査 氏 名 國吉 緑



学位（博士）論文審査及び最終試験の終了報告書

学位（博士）の申請に対し、学位論文の審査及び最終試験を終了したので、下記のとおり報告します。

記

申請者	専攻名 保健学 氏名 大城 あずさ 学籍番号 [REDACTED]
指導教員名	外間 登美子
成績評価	学位論文 (合格) 不合格 最終試験 (合格) 不合格
論文題目	Intimate Partner Violence among General and Urban Poor Populations Kathmandu, Nepal
<p>本論文は都市の一般人口と貧困層における夫婦間暴力(Intimate Partner Violence; IPV)の比較研究であり、ネパール都市部の一般人口および貧困層における夫婦間(intimate partner violence; IPV)の prevalence および危険因子を同定したものである。</p> <p><u>研究内容</u></p> <p>調査方法は対面式質問紙法により調査した横断研究である。対象はカトマンズに居住する 905 人の既婚婦人(15 歳以上 49 歳以下)である。そのうち 680 人は無作為抽出により選択した一般人口であり、225 人は意図的に選択した 2 つの貧困地区の住民である。夫による身体的暴力経験の prevalence およびさまざまな社会的・人口統計学的因子と身体的暴力の関連を SPSS および AMDS を用いて分析し下記のように興味ある知見を得ている。</p> <ol style="list-style-type: none">1) 都市部貧困層における夫からの身体的暴力の経験は 33.8%に認められ、一般人口 (19.9%) に比して有意に多かった ($p<0.01$)。2) 両人口において、夫の飲酒頻度、一夫多妻、家庭の低い経済レベルは夫からの身体暴力経験に	

有意に関連していた。

3) 夫の教育レベルの低さ、女性の若年結婚は一般人口のみで有意な関連を示していた。

以上のことから結論として都市一般人口に比較して貧困層では夫からの身体的暴力が有意に多く、危険因子にも違いがあり都市貧困層に対しては独自のデータ収集および介入が必要であると述べている。

研究成果の意義と学術的水準

本論文は調査の目的、サンプリング、調査の手順、手続きが的確であり、解析・考察・研究の限界についても述べている。アンケート調査にはインターナショナルに開発され、さらに南アジアのバングラディッシュでもすでに使用された WHO の質問紙を用いており、過去および現在の身体的バイオレンスを分析している。途上国都市部の貧困層におけるパートナー間暴力に関する知見として夫の飲酒頻度、一夫多妻、経済力が共通にみられ、夫の教育レベル、女性の若年結婚は一般人口のみでリスクファクターとなっていることを明らかにしている。これは重要な知見であり、南アジアの途上国における都市部貧困層に有効な予防的 IDV への介入の方法にひとつの視点を提供するものである。

審査は口頭による公開審査により行い、方法論に関する知識と技術、当該研究における本論文の位置付け、関連する研究業績に関する考察と現状の把握がなされていることを確認し、合格と判定した。